



Title	大阪方言における引用標識のバリエーションと変化 : 「言う」「思う」の音便形との共起関係を中心に
Author(s)	西田, 有希
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2022, 18, p. 47-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪方言における引用標識のバリエーションと変化

—「言う」「思う」の音便形との共起関係を中心に—

西田 有希

【要旨】

本研究は、3世代の談話資料から、大阪方言におけるト抜け及び引用標識のバリエーションとその変化を明らかにするものである。分析においては、引用標識のバリエーションだけでなく、引用動詞「言う」「思う」との共起関係に着目し、「言う」「思う」の音便形との共起や活用形によるト抜けの生じやすさの違いを見た。

本研究で明らかになったことは主に以下の点である。(A) ト抜けは世代が下がるにつれて衰退し、若年層ではほとんど用いられていない。ト抜けに代わって多く用いられている引用標識は、ト抜けのような生起環境の制限を持たないッテ／トである。(B) ト抜けの衰退によりウ音便形の存在意義が薄れ、引用標識と音便形の組み合わせは「Ø(ト抜け)＋ウ音便形」から「ッテ／ト＋促音便形・混交形」へと変化している。(C) 「言う」「思う」はテ形・タ形の場合、方言らしい表現であるウ音便形もしくは混交形が多用されるため、それ以外の場合に比べてト抜けと共起しやすい。

【キーワード】 大阪方言、引用標識、ト抜け、「言う」、「思う」、音便形

1. はじめに

大阪方言の一つの特徴として、引用標識の省略が挙げられる。標準語の場合、引用をする際はッテやトなどの引用標識を用いなければならないが、大阪方言ではこの引用標識を省略することができる。例えば、以下のようなものである¹⁾。

(1) もう大変やØゆーてたわ。 [③：S1]²⁾

(標準語訳：もう大変だッテ言ってたよ。)

(2) 理科系はあかんなあØ思た。 [⑭：S4]

(標準語訳：理科系はだめだなあト思った。)

例文におけるØは引用標識が省略されていることを表している。このような現象には「ト抜け」「引用形式トのゼロマーク化」「引用標識のØ化」など様々な名称がつけられているが、本研究では「ト抜け」と呼ぶこととする。

しかしト抜けは、高年層や中年層では比較的に見られるものの、若年層ではあまり使用され

-
- 1) 本稿における例文は、特に注釈がない限り調査によって得られた用例であり、引用標識は全てカタカナで表記するものとする。
2) 用例末尾 [] 内の番号・記号は本研究における [データ番号：インフォーマント ID] を表している。談話資料とインフォーマントの詳細については、4節で後述する。

なくなっており、代わって以下に示すような、ツテやトなどの引用標識が使用されるようになっていと感じる。

(3) どうやってやるツテやった？ [①:Y3]

(4) 頑張ってほしいなト思ってる。 [⑩:Y8]

本研究は、談話資料を用いて世代ごとのト抜けの使用実態を比較し、ト抜けの衰退プロセスを明らかにするとともに、ト抜けに代わってどのような引用標識が用いられているのかを明らかにしようとするものである。

また、ト抜けの存在は、ワ行五段活用動詞のウ音便形（以下「ウ音便形」とする）の維持に関わっているという先行研究の指摘がある（詳細は 3.4 節を参照）。そこで本研究では、ト抜けの衰退において、引用動詞ウ音便形との共起が、どの程度関係しているのかという点にも着目して分析を行う。

本研究の構成としては、まず 2 節で本研究において対象とする大阪方言について説明し、3 節で先行研究と問題のありかをまとめる。4 節で調査の概要をまとめた後、5 節および 6 節でデータの分析を行い、7 節で考察、8 節でまとめをおこなう。

2. 大阪の方言区画

この節では、本論に入る前に、大阪府下の方言区画と本研究で扱う大阪方言について説明しておく。

郡編（1997）によると、大阪府には伝統的に 3 つの方言区画があるとされており、それぞれ「摂津方言（府北部と大阪市）」「河内方言（府東部）」「和泉方言（府南部）」と呼ばれている。しかしこの 3 つはもともと似ており、中でも摂津方言と河内方言は特に似ているため、大阪府のことばは「摂津河内方言」と「和泉方言」に分けるのが適当であると述べられている。

また岸江（2009）では、泉北諸方言と泉南諸方言で構成される和泉方言のうち、前者が摂津・河内の諸方言に似ていることに着目し、摂津・河内・泉北をひとつのグループとする「摂津・河内方言」と「泉南方言」に大別できるとしている。

本研究で扱う大阪方言は、伝統的区分における摂津方言とし、本文中における「大阪方言」は摂津方言を指すものとする³⁾。ただし先行研究の通り、現在の大阪の方言区画は変化していることから、本稿における「大阪方言」は「摂津河内方言」（郡 1997）、「摂津・河内方言」（岸江 2009）を指すとも言える。また、本研究で扱うト抜けは、摂津方言に限らず、大阪方言全般で見られる現象である。

3) 伝統的区分における摂津方言域とは、大阪市、豊中市、吹田市、池田市、箕面市、豊能町、能勢町、摂津市、茨木市、高槻市、島本町に加え、兵庫県 of 東南部のことである。本研究の調査協力者はいずれも摂津方言域で言語形成期を過ごしている大阪方言話者である（4.1 節参照）。

3. 先行研究と問題のありか

この節では、まず 3.1 節において、大阪方言における引用助詞の省略について説明し、伝統的に使用されている引用標識についても確認する。続いて 3.2 節では、ト抜けの生起条件と先行研究におけるト抜けの言語内的要因と言語外的要因についてまとめる。3.3 節では、引用標識のバリエーションのうち、大阪方言において特徴的なものを取り上げ、3.4 節では、ウ音便の維持に関わるト抜けの重要性について触れる。最後に 3.5 節で問題のありかを整理し、リサーチクエスチョンを提示する。

3.1. 大阪方言における引用の助詞

大阪方言は、助詞の省略が頻繁に起こることで知られている。山本（1982）では、「言う・思う」に上接するトはいわゆるト抜けを起こす。「～という」はチューとなり、場合によっては「と」がテになる」と述べられている。また、郡編（1997）によると、大阪方言において「ワ（は）」「ガ」「オ（を）」と、「…と言う」の「ト」は省略して言うことが多い」という。また、引用標識については、「テ」または「ト」を使うが、「思う」そして特に「言う」に続くときはよく省略するのが特徴」と述べられており、「中国という国」の場合は「中国テュー国」「中国チュー国」「中国ユー国」になると述べられている。若年層では「中国ッテュー国」になるとしている。

このことから、大阪方言において、ト抜けは伝統的な引用標識であり、またそれ以外に用いられている伝統的な引用標識は、テ、ト、もしくは縮約形（チュー）だということが分かる。ただ、いずれにおいてもト抜けが衰退していることについてはあまり言及されていない。

3.2. ト抜け

ここでは、「ト抜け」について説明する。以下の例文に示すように、大阪方言を含む西日本方言に見られるト抜けには、引用句に動詞「言う」「思う」が後接する場合のみに起こり間に助詞や他の成分が介在する環境では生起しない、という厳しい条件が存在する。

- (5) 「もう大変や」{テ/∅} ゆーてた。
- (6) 「もう大変や」{テ/∅} おもてた。
- (7) 「もう大変や」{テ/*∅} 彼はゆーてた。
- (8) 「もう大変や」{テ/*∅} 彼はおもてた。

((5) ～ (8) は (1) をもとにした筆者の作例)

また、「言う」「思う」以外にも、「聞く」「書く」「考える」など引用節を取ることができる動詞はあるが、ト抜けが可能なのは「言う」「思う」だけであり、他の動詞ではト抜けすることができない。

- (9) 「もう大変や」{テ/*∅} 聞いた。
- (10) 「もう大変や」{テ/*∅} 書いた。

((9) (10) は (1) をもとにした筆者の作例)

ト抜けに関する先行研究として、朝日（2008）、小西（2010）が挙げられる。朝日（2008）は、引用形式「ト」のゼロマーク化という観点から、西神ニュータウンにおける方言接触に

ついて分析したものである。朝日（2008）では、ト抜けの言語内的要因として、引用動詞の中でも「言う」「思う」に先行する場合に観察されることが挙げられている。また、言語外的要因としては、老年層ではゼロマーク化が見られるが若年層では見られなくなっていること、「改まった場面」よりも「くだけた場面」の方が、ゼロ形が使用されやすいことを挙げている。

分析に当たって朝日（2008）は「トイウ」の意味・機能に着目し、(I) 引用動詞「言う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合、(II) 引用動詞「言う」の語彙的意味が希薄化した場合（文法化が生じた場合）の二つに分けている。そのうえで、(I) 語彙的意味がそのまま用いられる場合（文法化が生じていない場合）の方が、ゼロマーク化率が高いことを明らかにした。また、西神ニュータウンの兵庫県内出身者の引用形式は、中年層、若年層と世代が下がるにつれてゼロマーク化率が低下していることを併せて示した。

小西（2010）は、引用標識の〇化が見られる西日本地域（大阪を含む）を対象として、引用標識の頻度と言語内的要因の定量分析を行ったものである。小西（2010）では、〇化に関わる言語内的要因として、まず〇化の生起制限を挙げている。〇化が起こるのは、引用句（引用内容＋引用標識）を受ける動詞が「言う」「思う」で、かつ引用句の後ろに助詞や他の成分が介在せず、「言う」「思う」が直接後続する場合だとしている。また、生起制限以外には、「言う」と「思う」では「言う」の方が〇化しやすいこと、「～と言う」が複合辞化した場合には〇化しにくいことを挙げている。

分析において小西（2010）は、朝日（2008）を踏まえ、「～と言う」の意味を①発話の引用、②呼び名の引用、③接続助詞型複合辞、④連体助詞型複合辞、⑤その他の複合辞、の5つに分け、①では〇化率が高いが、②～⑤（特に④）では〇化率が低いことを明らかにした。またその理由として、引用標識の機能負担を挙げている。①のように引用部分の発話再現性が高い場合は引用標識がなくとも引用句だと解釈しやすく（つまり、引用標識の機能負担が軽く）〇化しやすくなる一方、②の場合は、引用部分と地の文とで差がなく、また、引用部分と述語動詞「言う」とで動詞主体を区別するために引用標識が機能することから〇化が起りにくいとしている。

なお、朝日・小西の分類は名称こそ異なるものの、分類の枠としてはおおそ同じである。

3.3. 引用標識のバリエーション

小西（2010）では、ト抜けが見られる西日本方言における引用標識のバリエーションを次のようにまとめている。なおここには、ト抜けが起こり得ない環境における引用標識も含まれている。

- | | |
|-------------|------------|
| (11) 〇（ト抜け） | (15) 縮約 i |
| (12) ト | (16) 縮約 ii |
| (13) （ッ）テ | (17) 他 |
| (14) （ト）ユーテ | |

(15) の「縮約 i」は有形の引用標識ト等と「言う」が縮約したもののうち、「言う」の語形が保たれているもので、「と言うんですよ」が縮約した「チュイマンネン」や、「という」

が縮約した「ツツ」などを挙げている。(16)の「縮約 ii」は「言う」の語形が保たれていないもので、「ていうような」が縮約した「テナ」、「ていって」が縮約した「テテ」などを挙げている。また、(17)の「他」には「テ(ッ)テ」「オモテ」などが含まれるとしている。

郡編(1997)では、大阪方言の引用標識はト抜け、テ、トだと述べられていたが、小西(2010)においてはより豊富なバリエーションが見られる。中でも特徴的なのは、以下のような(ト)ユーテという引用標識である。

- (18) コドモシュー チョット イッテコーイ ユーテ ユータラ
 (「子供衆、ちょっと行って来い」{と／×と言って} 言ったら、) [Os2⁴⁾]
 (小西 2010 からの引用)

小西(2013)でも述べられている通り、大阪方言を含む西日本方言の一部の方言には「ト言う」のテ形に相当する形式を、引用の助詞「ト」と同様の引用標識として用いる現象が観察される。構造上は「ト言う」のテ形に相当するが、「ト言って」と共通語訳することはできず、引用動詞句テ節の性質を失い、引用助詞「ト」に相当する引用標識として機能している。

3.4. ト抜けとウ音便化

1節でも触れたように、ト抜けの存在は、ウ音便形の維持に関わっているという指摘がある。関西方言におけるワ行五段活用動詞ウ音便形の衰退について扱った高木(2006)では、ワ行五段活用動詞において、「言う」「思う」のウ音便形の使用率が他の動詞に比べて高いのは、ト抜けと共起しているからだとしている。

この背景には、まず、ト抜けは引用動詞が「言う」「思う」の場合にのみ起こる現象であるということと、大阪方言における動詞「言う」「思う」のテ形・タ形は伝統的にウ音便形で使用されるということがある。

- (19) もう大変やのゆーてたわ。 [③:S1] ((1) 再掲)
 (20) 理科系はあかんなあの思た。 [⑭:S4] ((2) 再掲)

また(19)のように、ト抜けの場合、後ろの動詞がテ形・タ形であれば、その動詞の音便形は原則ウ音便形でなくてはならない。したがって、ウ音便形はト抜けによって存在意義が保たれ、ト抜けの部分にはウ音便形が残りやすくなっているのである。

しかし、高木(2006)において言及されているのは、音便形を持つテ形・タ形の「言う」「思う」とト抜けの関係のみであり、テ形・タ形以外の、音便形をとらない「言う」「思う」とト抜けの関係については不明である。

3.5. 問題のありか

ト抜けは大阪方言の一つの大きな特徴として言われてきたが、筆者(大阪府池田市生え抜き)の内省では、高年層・中年層では比較的良好に見られるものの、若年層ではほとんど見られなくなっているように感じる。朝日(2008)は、西神ニュータウンと^{はぜたに}櫛谷町をフィールド

4) 小西(2010)において付された談話 ID であり、Os は大阪を表している。

として世代ごと、出身ごとにト抜けの使用率を調査し、ト抜けの使用に世代差があることを示しているが、大阪方言においても同じような変化が生じている可能性がある。ト抜けを大阪方言の特徴だとしている郡編(1997)においても、ト抜けが衰退していることには言及されておらず、大阪方言におけるト抜けの実態を明らかにする必要がある。

また、前節で述べた通り、高木(2006)はト抜けとウ音便形のかかわりについて指摘しているが、ウ音便形は「言う」「思う」がテ形・タ形の場合のみ起こるものであり、テ形・タ形以外の「言う」「思う」とト抜けの関係については不明である。ト抜けはウ音便形には縛られない現象であるため、ト抜けの全貌を明らかにするためには、テ形・タ形以外の形にも着目する必要がある。

以上を踏まえ、本研究では、3世代のインフォーマントの談話資料から、ト抜けの衰退プロセスを明らかにすると同時に、ト抜けの他にどのような引用標識が用いられているのかを明らかにすることを目的とする。また、引用動詞の音便形との共起関係や、どの活用形の場合にト抜けが生じやすいのかについても考察する。

具体的なりサーチクエスションは以下の3点である。

- (a) 各世代において、ト抜けを含む引用標識はどのように用いられているのか。また、どのように変化しているのか。
- (b) 引用標識と引用動詞「言う」「思う」の音便形はどう共起しているのか。
- (c) 引用動詞「言う」「思う」の活用形によって、ト抜けの生じやすさに違いはあるのか。

4. 調査の概要

この節では本研究において行った調査の概要を述べる。ト抜けを含む引用標識の世代差を調査するため、高年層から若年層まで、合わせて24名に調査を依頼し、カジュアル談話の収集を行った。4.1節でインフォーマントの詳細、4.2節で談話資料の詳細について述べる。

4.1. インフォーマントについて

本研究では、インフォーマントの条件を「言語形成期を主に摂津方言域で過ごし、現在も大阪在住で大阪方言を日常的に使用する人」とし、高年層(65歳以上)5名、中年層(35～64歳)9名、若年層(16～34歳)10名の協力を得た。インフォーマントの詳細は表1-1、1-2、1-3の通りである⁵⁾。表中の年齢はいずれも調査時のもの。一部のインフォーマントは誕生日をまたいで複数回収録を行ったため、「80-81」のように表記している。また「外住歴」欄については、本稿では、摂津方言域(2節参照)以外の地域における居住歴を「外住歴」とし、該当する場合には当時年齢と居住地の情報を記した(市区町村レベル。海外の場合は単に「海外」とのみ表記)。

5) インフォーマントIDのアルファベットはそれぞれ Senior (高年層)、Middle (中年層)、Young (若年層)を表す。

大阪方言における引用標識のバリエーションと変化

表 1-1 インフォーマント情報（高年層）

ID	生年	年齢	性別	外住歴	参加した談話
S1	1939	80-81	女	24-25：大阪府交野市	①、③、⑨
S2	1953	66-67	男	24-25：海外、29：海外	②、⑨、⑫、⑬、⑭
S3	1944	76	男	22-23：東京都葛飾区	⑫
S4	1948	72	男	(なし)	⑬、⑭
S5	1951	69	女	(なし)	⑬、⑭

表 1-2 インフォーマント情報（中年層）

ID	生年	年齢	性別	外住歴	参加した談話
M1	1967	52-53	女	(なし)	③、⑨
M2	1968	51-52	女	(なし)	①、②、③、⑨、 ⑩、⑫、⑬、⑭
M3	1970	49-50	女	30-32：兵庫県神戸市	⑨、⑩、⑪
M4	1971	49	女	26-27：兵庫県神戸市、27-31：兵庫県姫路市	⑦、⑧
M5	1973	47	女	25-27：兵庫県神戸市	④、⑬
M6	1978	41	男	(なし)	④
M7	1973	47	女	(なし)	⑫
M8	1969	52	女	(なし)	⑮
M9	1970	50	男	18-22：京都府京都市、22-24：神奈川県川崎市	⑩、⑪

表 1-3 インフォーマント情報（若年層）

ID	生年	年齢	性別	外住歴	参加した談話
Y1	1998	21	女	(なし)	⑤、⑥
Y2	1998	21	女	0-4：兵庫県姫路市	⑦、⑧
Y3	2000	19	女	(なし)	①、②、⑫、⑬
Y4	2001	18	男	0-1：兵庫県姫路市	⑦、⑧
Y5	2001	18	男	0-1：兵庫県神戸市	⑩、⑪
Y6	2003	16	男	(なし)	⑩、⑪
Y7	1999	21	男	(なし)	⑮
Y8	1998	21	男	(なし)	⑯、⑰
Y9	2000	20	男	(なし)	⑰
Y10	1998	22	女	0-2：海外	⑱

4.2. データ収集について

朝日（2008）より、ト抜けは改まった場面よりもくだけた場面の方が現れやすいことが明らかになっていることから、自然談話を録音することでデータの収集を行った。収録は2019年12月～2020年9月にかけて計18回行い、約16時間分の談話資料を収集した。データ

の詳細は表 2 の通りである。データによって収録時間や会話に参加している人数、世代にばらつきはあるものの、いずれも親しい人とのカジュアルな会話である。録音は、予め会話の参加者に許可を取っており、筆者自身が行ったものと、インフォーマント自身にお願いしたものがある。なお、筆者と、インフォーマントの条件（4.1 節参照）に合わない会話参加者の発話は分析対象外とする。

表 2 談話資料の詳細

データ番号	収録日	収録時間*	参加者
①	2019/12/15	0:37:20	S1、M2、Y3、筆者
②	2019/12/16	1:18:01	S2、M2、Y3、筆者
③	2020/1/2	0:37:27	S1、M1、M2、筆者
④	2020/4/18	1:03:08	M5、M6
⑤	2020/4/28	0:17:43	Y1、Y1 の両親
⑥	2020/4/29	0:22:55	Y1、Y1 の両親
⑦	2020/5/5	0:19:07	M4、Y2、Y4
⑧	2020/5/6	0:58:25	M4、Y2、Y4
⑨	2020/6/21	2:31:54	S1、S2、M1、M2、M3、筆者
⑩	2020/7/13	0:40:34	M3、M9、Y5、Y6
⑪	2020/7/13	0:23:32	M3、M9、Y5、Y6
⑫	2020/8/15	1:20:24	S2、S3、M2、M7、Y3、筆者、S2 の妻
⑬	2020/8/15	2:12:24	S2、S4、S5、M2、M5、Y3、筆者
⑭	2020/8/15	0:45:32	S2、S4、S5、M2、筆者
⑮	2020/8/27	0:49:51	M8、Y7、Y7 の祖父
⑯	2020/8/30	0:41:15	Y8、Y8 の友人
⑰	2020/8/25	0:20:38	Y8、Y9、友人 2 人
⑱	2020/9/8	0:32:57	Y10、友人

*収録時間は「時：分：秒」で示してある。

5. 分析方法

この節では、本研究における分析の枠組みについて述べる。

まず先述の通り、ト抜けは引用句に動詞「言う」「思う」が後接する場合のみに起こり、助詞や他の成分が介在する環境では生起しない、という生起条件が存在する。

(21) 「もう大変や」{テ／◇} ゆーてた。

(22) 「もう大変や」{テ／◇} おもてたわ。

(23) 「もう大変や」{テ／*◇} 彼はゆーてた。

(24) 「もう大変や」{テ／*◇} 彼はおもてた。 ((5) ～ (8) の再掲)

これを踏まえ、本研究では (21) (22) のような、談話資料から得られた「言う」「思う」が直接後続する引用表現（ト抜けが起こりうる環境）と、後接する「言う」「思う」を分析

対象とする。したがって引用節を取らない「言う」「思う」に関しては分析から除外した。

5.1. 「ト言う」の分析の枠組み

分析の枠組みだが、まずここで先行研究である朝日（2008）の枠組みの詳細を提示しておく。朝日は引用動詞「言う」の文法化の有無を基準とし、次のように分類している。例文は朝日（2008）からの引用である。

(I) 引用動詞「言う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合

(25) 世の中の 何が あるか わからへん Ø ユーテ [HE 2001-97-23-45]⁶⁾

(II) 引用動詞「言う」の語彙的意味が希薄化した場合

(II-a) 助動詞的複合辞としての「トイウ」（「伝聞」の意味を表す「トイウ」）

(26) 中学生の ストレス性脱毛症 Ø ユーの あれ [HE 2001-97-24-40]

(II-b) 助詞的複合辞としての「トイウ」

(b-1) 同格を表す「トイウ」

(27) あっこに 上げて どないや Ø ユー 案が 出て [HC 2001-74A-37-23]

(b-2) 接続助詞的な「トイウ」

(28) 一番前 Ø ユータラ 停車場所は [HC 2001-74B-08-04]

(b-3) 提題助詞的な「トイウ」

(29) もう一つ 困った Ø ユーノハ 遺跡が 統合した わけ
[HB 2001-74A-36-23]

本研究では、得られた用例数とその用法に鑑み、朝日（2008）の枠組みのうち、「語彙的意味がそのまま用いられる場合」と「語彙的意味が希薄化した場合」の二つの枠組みを参考にする。

ここで、分析に先立ち、語彙的意味が希薄化しているかどうかの判断において、筆者が判断基準を設けた3つについて述べておく。

①「引用標識Ø+ゆーて」と「引用標識ユーテ（+述語動詞）」の判別

3.3節で述べた通り、大阪方言には「Øユーテ」という引用標識が存在するため、発話において「ゆーて」が現れた場合、「引用標識Ø+述語動詞ゆーて」と「引用標識Øユーテ+述語動詞」の可能性が考えられる。小西（2013）では、「引用内容+「と言う／思う」テ形+述語動詞」という構造の文で、「と言う／思う」テ形部分を「と言って／思っで」と訳せる場合は、「Ø」や「ト」等を引用標識と見なしている。

本研究ではこれを踏まえ、「ゆーて」の後ろに「言う」相当の語があれば「引用標識Øユーテ+述語動詞」、なければ「引用標識Ø+ゆーて（述語動詞）」と見なすこととする。例えば、以下の(30)は「引用標識Øユーテ+ゆーたら」、(31)(32)は「引用標識Ø+ゆーて」だと見なす。

(30) 家まで送らせろーØユーテゆーたら、ちゃんと家まで送ってくんねん。

[① : M2]

6) 朝日が付したもので、話者と録音テープの該当箇所を示すIDである。

(31) 私だけ会ってあっはっはーゆーて帰ってきて何が楽しいねん。 [①：M2]

(32) おうちの近くの病院行ってしてもらってくださいーゆーて応急処置だけしてもらって [①：S1]

また、以下のように文末が「ゆーて」で終わっているものもあった。

(33) どうしははおつもりですかーゆーて。 [②：M2]

(34) 茨木の人でしたわーゆーて。 [③：S1]

これに関しては、「ゆーて」自体が述語動詞の働きをしていると考えられるため、「引用標識の+述語動詞ゆーて」として扱う。

②文末の「ッテゆう」

以下のように、文末が「ッテゆう」になっている例がいくつか見られた。

(35) 珍しく二人とも家にいるッテゆう。 [①：M2]

(36) 100 で返してくれへんッテゆう。 [②：Y3]

このような表現は、甲田（2013）において、「被修飾名詞を欠いて終了する中途終了型名詞修飾形式」とされている。そもそも中途終了型とは、「接続助詞言いさし、名詞修飾形式言いさし等、主節や被修飾名詞を欠いて終了する形式である」と述べられている。また『『っていう』で言い切り、後続する被修飾部 N に『話／状態／状況』等を当てはめて考えることができる』と述べられていることから、朝日（2008）における「同格」に分類されると考え、「言う」の語彙的意味が希薄化した場合として扱った。

③「っちゅうねん」

(37) 合言葉忘れるっちゅうねん。 [⑨：M2]

(38) やってきたっちゅうねん。 [⑨：M2]

この「っちゅうねん」の「っちゅう」は、「ト言う」が縮約した形式であるが、「忘れるというのだ」「やってきたというのだ」というように、「ト言う」に標準語訳すると不自然になる。したがって、語彙的意味が希薄化した場合に分類することとする。

5.2. 「ト思う」の分析の枠組み

朝日（2008）では、「言う」に関する枠組みしか設けられていなかったが、「思う」についても、語彙的意味がそのまま用いられる場合と、モダリティ化している場合が存在する。森山（1992）ではモダリティ化した「と思う」について次のように述べている。

「一人称主体の「と思う」が文末におかれた場合、単に動作としての思考を表すというのではなく、話し手のとらえ方を表示するという特異な機能を有していると言う必要がある。いわば、助動詞的なものへと変質した使用のされ方をしている」

（森山 1992）

また、宮崎（1999）では、スル形（完全相・非過去・肯定形）で一人称主体が省略されており、かつ引用節に有標的な判断や表出の形式が出現しない場合において、「と思う」は「ダロウ」に近似しているとしている。

以上を踏まえ、本研究では、一人称主体でスル形（完全相・非過去・肯定形）、かつ引用節に有標的な形式が出現しない場合を「モダリティ化した場合」、それ以外を「語彙的意味

がそのまま用いられる場合」として分類することとする。

6. 分析結果

調査によって得られた談話資料の分析を行う。まず 6.1 では、得られた引用標識のバリエーションを整理した後、「言う」が後接する場合と「思う」が後接する場合の二つに分け、ト抜けを含む引用標識の現状を見る。次に 6.2 では、引用標識に後接する「言う」「思う」の音便形に着目し、引用標識と音便形がどのように共起し、変化しているかを見る。最後に 6.3.では、引用動詞「言う」「思う」の活用形に着目し、活用形ごとのト抜けの生じやすさについて見ていく。

6.1. 引用標識のバリエーション

この節では、まず本研究で得られた引用標識のバリエーションを整理した後、「言う」が後接する場合と「思う」が後接する場合、それぞれの引用標識を見ていく。

まず調査によって得られた引用標識のバリエーションは以下の通りである。なお、ここではト抜けが起り得る環境の引用標識のみを扱っている。

- | | |
|--------------|------------|
| (39) の (ト抜け) | (43) トカ |
| (40) テ | (44) ユーテ類 |
| (41) ッテ | (45) 縮約 |
| (42) ト | (46) トオモッテ |

伝統的な大阪方言の引用標識であるテやト以外にも、小西 (2010) のように多くのバリエーションが見られた。小西 (2010) において、「ト言う」のテ形が引用標識化したものは「(ト) ユーテ」しか挙げられていなかったが、談話資料からは、次に挙げるようにかなり豊富なバリエーションが確認できた。

- (47) ユーテ類
- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| a. のユーテ | b. テユーテ | c. ッテユーテ | d. ッテユッテ |
| e. ッテイッテ | f. トカユーテ | g. トカユッテ | h. トカイッテ |

以下に用例を一部挙げておく。

- | | |
|---------------------------|----------|
| (48) 次いつ来んののユーテゆうから | [⑨ : S1] |
| (49) おかしいなおかしいなッテユッテゆって | [⑨ : M3] |
| (50) どうしようもないしなートカイッテゆうので | [⑨ : M2] |

このような「ト言う」のテ形が引用標識化したものは、それぞれ得られた用例数が、他の引用標識に比べて少なかったため、ひとまず「ユーテ類」としてまとめて扱うこととする。また縮約では、以下のように、小西 (2010) の縮約 i に当たる「ツチュー」「ツツッテ」などが見られたが、縮約 ii に当たる引用標識は見られなかった。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| (51) 合言葉忘れるツチューねん。 | [⑨ : M2] ((37) 再掲) |
| (52) もうええわツツッテ。 | [⑬ : M5] |

6.1.1. 「言う」が後接する場合の引用標識

朝日(2008)に倣い、引用標識の後に続く「言う」が語彙の意味のまま用いられる場合と、希薄化した場合と大きく二つに分け、世代ごとに分析する。

まず、「言う」の語彙の意味がそのまま用いられる場合というのは、以下のように、「言う」が〈発話する〉という意味を表しているものである。

(53) チャンネル変えてトカゆうやん。 [⑫：S3]

(54) ファンヒーターありますかのゆわれて [⑫：M2]

(55) 来ないでくださいッテゆった。 [②：Y3]

この場合の引用標識のバリエーションと使用数を世代ごとにまとめたものが表3である。表中の数字は用例数を、「－」はデータがなかったことを示している（以下同様）。ト抜け率は、○の用例数をその世代の合計用例数で割り、100を掛けたものである。例えば、表3における高年層のト抜け率は、134（○の用例数）÷205（高年層の合計用例数）×100で求めている（以下同様）。

表3 「言う」の語彙の意味がそのまま用いられる場合の引用標識

	ト抜け率(%)	○	テ	ッテ	ト	トカ	ユーテ類	縮約	計
高年層	65.4	134	13	38	－	6	14	－	205
中年層	35.7	136	9	130	2	76	12	16	381
若年層	5.9	8	5	104	4	12	1	1	135

ト抜けの用例数だけ見れば、高年層（134例）と中年層（136例）ではあまり変わらないように見えるが、中年層はッテやトカなどの用例数も多く、ト抜け率としては高くない。若年層においてはほとんどト抜けが見られず、世代が下がるにつれて、ト抜け率が下がっていることが分かる。また、「ユーテ類」も主に高年層・中年層に現れ、若年層では1例しか現れなかった。高年層や中年層では、ト抜けとッテ以外にも、ユーテ類など引用標識に豊富なバリエーションが見られるが、若年層では引用標識がッテに収束しつつあることが読み取れる。

また、ト抜けやユーテ類と同様、世代が下がるにつれて、方言形テもあまり見られなくなっている。若年層において数例見られるテは「～んテ」となっていることが多く、撥音の直後に促音を発音しにくいことから、標準語形ッテが一時的にテになったものだと思われる。テの直前が撥音でないものは1例しか見られなかった（用例（58））。

(56) ごめんんテゆって [②：Y3]

(57) なんでなんテゆうくない？ [⑦：Y2]

(58) 全然余裕で買うーテゆーてな [⑧：Y2]

また、中年層において、トカがかなり多く見られた。

(59) 紙袋ちょうだいトカゆーて [①：M2]

(60) ほんまにいいの？トカゆって [⑦：M4]

(61) ほんまカートカ言いながら

[⑨：M3]

これについては、辻（1999）などで言及されているように、1990年代ごろから、若者言葉として特に意味を持たない「とか」が多用されるようになったことが影響しているのではないかと考えられるが、砂川（2000）で述べられているトカの持つ機能が影響しているとも考えられる。砂川（2000）において、「とか」は「引用句自体に存在する連続性や曖昧性が、並立助詞の「とか」の性質と類似しているため、並立助詞から引用マーカーへと文法化した」とし、「引用を単に指標しているだけではなく、その状況の曖昧さや、不確性も指標しているといえる」と述べられている。このことから、トカという引用標識は、引用標識としての機能のみを持つトやッテとは異なり、単なる引用標識としての機能のほかに、曖昧さや不確性を表す機能があることが分かる。したがって、トカの使用は、話題や発話内容に影響されうるものであり、単なる世代差によるものだとは言い切ることはできない。

続いて、語彙的意味が希薄化した場合を見ていく。語彙的意味が希薄化した場合というのは、以下のようなものである。5.1で述べた通り、細かく分類することはしないが、今回得られた発話では、同格として用いられているものがほとんどであった。

(62) テッポウウオッテゆう魚おるけど

[⑩：Y9]

(63) 日本負けるわーのゆー感じやったわ。

[⑪：S2]

(64) バン！って叩いたら直るッテゆう。

[⑫：Y3]

この場合の引用標識のバリエーションと用例数を世代ごとにまとめたものが表4である。

表4 「言う」の語彙的意味が希薄化した場合の引用標識

	ト抜け率(%)	〇	ッテ	ト	トカ	ユーテ類	縮約	計
高年層	63.0	63	13	22	—	1	1	100
中年層	15.5	9	34	1	4	6	4	58
若年層	0.0	—	38	1	2	—	1	42

ト抜け率を、「言う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合（表3）と比べると、高年層では65.4%（表3）に対し63.0%（表4）とあまり変わらないが、中年層では、35.7%（表3）に対し15.5%（表4）とかなり低くなり、若年層に関しては5.9%（表3）に対し0.0%（表4）となっている。朝日（2008）では、「ゼロマーク化は文法化が生じない場合（語彙的意味がそのまま用いられる場合）に多く観察される」とあったが、中年層と若年層では同様の傾向が見られた。

また、中年層・若年層では、ト抜けに代わってッテが主に用いられており、トの使用はほとんど見られなかった。一方、高年層においてはトがかなり多く見られた。これは以下に示すように、若年層における同格の引用標識はッテが多数であったが、高年層ではトが多数であったことと関連すると考えられる。

(65) みんなもめないでよトゆうくらの

[⑬：S2]

(66) 失礼かなトゆうことでも

[⑭：S3]

(67) 飲んでみよかトゆう気が起こるだけですごい。 [⑬：S4]

(68) 足があったかいッテゆうのがいいねん。 [①：Y3]

(69) オープンにするッテゆうのが [⑮：Y7]

6.1.2. 「思う」が後接する場合の引用標識

5.2 で述べたように、「思う」が後接する引用については、「語彙的意味がそのまま用いられる場合」と「モダリティ化した場合」の二つに分けて分析する。

まず、語彙的意味がそのまま用いられる場合というのは以下のようなものである。

(70) 高校やの思ってたわ。 [⑫：S3]

(71) おもしろいなト思っ [⑨：M3]

(72) 完璧な人間おらんからッテ思ってたけど [②：Y3]

この場合の引用標識のバリエーションと用例数を世代ごとにまとめたものが表5である。

表5 「思う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合の引用標識

	ト抜け率(%)	〇	ト	ッテ	テ	トオモッテ	トカ	計
高年層	30.2	16	35	1	1	—	—	53
中年層	23.1	27	82	3	1	1	3	117
若年層	1.2	1	67	11	1	—	1	81

ト抜けは高年層・中年層を中心に見られるものの、「言う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合（表3）に比べると割合が低くなっており、高年層でも3割となっている。引用標識のバリエーションは「言う」に比べて少なく、どの世代においてもトが最も多く使用されていた。

世代が下がるにつれて、ッテの割合が高くなっているが、これは、「言う」においてッテがよく用いられるようになっていくことが背景にあるのではないかと考えられる。

また、1例のみ以下のようなトオモッテという引用標識が見られた。

(73) 津雲台にあるんやへートオモッテ、思たんや。 [①：M2]

ただ、トオモッテと述語動詞「思う」との間には少しポーズがあり、「トオモッテ思た」という「引用標識＋動詞」の形ではなく、単なる言い直しの可能性も考えられる。このことは小西（2013）でも「「と思う」のテ形由来の引用標識は、確かな例と言えるものがほとんど得られず、話者の文法性判断を直接問うことによってかろうじて可とみなされる程度のもので、萌芽的な状態と言える」と述べられている。ここではひとまず引用標識として扱ったが、ユーテ類とは異なり、引用標識として確立したものとは言い難い。

続いて、モダリティ化した場合というのは以下のようなものである。

(74) おかしいト思う。 [②：M2]

(75) 頭混乱するト思うで。 [⑫：S3]

(76) 残しとくんやト思うねんけど [⑬：M2]

(77) みんなあるトと思うねん。

[⑭ : S4]

この場合の引用標識のバリエーションと用例数をまとめたものが表 6 である。用例数が少なかったため、ト抜け率を求めることはしていない。

表 6 「思う」がモダリティ化した場合

	〇	ト	計
高年層	1	8	9
中年層	—	23	23
若年層	—	10	10

「言う」の語彙的意味が希薄化した場合では、「言う」の活用形は基本形に限られなかったが、「思う」がモダリティ化する場合、「思う」の活用形は基本形に限られるため、用例数はかなり少なくなっている。また、「言う」の語彙的意味が希薄化した場合は、ト抜けがある程度生じていたが、「思う」の場合、ト抜けの例は 1 例しか見られず、ほとんどが「ト思う」という形でモダリティ化していると分かる。

6.2. 引用標識に後接する「言う」「思う」の音便形

続いて、後接する動詞の音便形に着目する。大阪方言における動詞「言う」「思う」のテ形・タ形には、「ゆーて／ゆーた」「おも（一）て／おも（一）た」というウ音便形がそれぞれ存在する。そして、ウ音便形に対し促音便形には、標準語と同じ「いって／いった」「おもって／おもった」という形があるが、「言う」の促音便形に関しては、「いって／いった」という標準語形と「ゆって／ゆった」という混交形が存在することが高木（2006）で述べられている。

また、本研究で得られた談話のうち、「言う」の語彙的意味が希薄化した場合は、ほとんどが同格として用いられているものであった。同格は「A という B」という形になるため、音便形は現れない。同格以外の用例はかなり少なく、その中でも音便形を持つものはほとんど見られなかった。また、「思う」のモダリティ化は、基本形の場合にしか起こらないため、音便形は存在しない。

以上を踏まえ、本節では、「言う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合と、「思う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合を扱い、それぞれの音便形がよく使用されているのかを世代ごとに分析する。

6.2.1. 「と言う」における「言う」の音便形

世代ごとに引用標識と音便形の組み合わせに着目してまとめたものが以下の表である。表 7 が高年層、表 8 が中年層、表 9 が若年層となっている。まず、全体的なウ音便形の傾向として、高年層においてはかなり頻繁に起こっているのに対し、中年層では促音便混交形と同程度になり、若年層ではほとんど見られないことが分かる。また、標準語形はどの世代

表 7 高年層の引用標識と音便形（言う）

高年層	〇	テ	ッテ	ト	トカ	ユーテ類	計
ウ音便形	108	4	11	—	4	9	136
混交形	—	—	8	—	—	1	9
標準語形	—	—	—	—	—	—	0
計	108	4	19	0	4	10	145

表 8 中年層の引用標識と音便形（言う）

中年層	〇	テ	ッテ	ト	トカ	ユーテ類	計
ウ音便形	128	4	14	—	14	9	169
混交形	3	—	73	—	48	4	129
標準語形	—	—	3	—	1	—	3
計	131	4	90	0	63	13	301

表 9 若年層の引用標識と音便形（言う）

若年層	〇	テ	ッテ	ト	トカ	ユーテ類	計
ウ音便形	4	1	1	—	—	—	6
混交形	2	1	69	—	5	1	78
標準語形	—	—	1	1	—	—	2
計	6	2	71	1	5	1	86

においてもほとんど見られていない。関西若年層の音便形について扱っている高木（2006）では、「言う」の促音便形のうち、2 割ほどが標準語形だったとされているが、現在の大阪方言においてはほとんど使用されていないと言えそうである。

続いて、この 3 つの表から各世代で主に用いられている引用標識と音便形の組み合わせが読み取れる。高年層では「〇＋ウ音便形」、中年層では「〇＋ウ音便形」「ッテ＋促音便混交形」「トカ＋促音便混交形」、若年層では「ッテ＋促音便混交形」がよく使用されている。このことから、中年層は高年層と若年層の特徴をどちらも持ち合わせていることが分かる。全体の傾向としては「〇＋ウ音便形」から「ッテ＋促音便形（混交形）」となっており、標準語の引用形式に近い形へと変化している。ただ、この変化の過程において、「ッテ＋ウ音便形」という形式が一定数見られることは着目すべき点である。

また、トカに着目すると、多くが「トカゆって」という混交形で用いられていた。高木（2006）において、2 割ほど見られた標準語形「いって」は、ほとんどが「～トカいって」⁷⁾という固定化された形で出現していると述べられていたが、表 7～表 9 を見てみると、「ト

7) 高木(2006)では全てカタカナで表記されているが、本稿では引用標識のみをカタカナで表記することとしているため、動詞部分はひらがなに変えている。

カいて」はわずか1例しか見られない。引用標識や音便形は、全体として標準語と同じ形に変化しつつあるにも関わらず、ここだけは「いて」から「ゆって」と方言形に変化しているのは、興味深い点である。

6.2.2. 「と思う」における「思う」の音便形

前節と同様、引用標識と音便形に着目し、世代ごとに表にまとめた。高年層が表10、中年層が表11、若年層は表12である。

ウ音便形の使用率は、「言う」の場合と比べると全体的に低いものの、世代が下がるにつれて使用されなくなっているという点は同様である。

引用標識と音便形の組み合わせは、高年層では「 $\emptyset$ ＋ウ音便形」「ト＋ウ音便形」「ト＋促音便形」、中年層では「 $\emptyset$ ＋ウ音便形」「ト＋促音便形」、若年層では「ト＋促音便形」が主に使用されており、「言う」と同様、「 $\emptyset$ ＋ウ音便形」から「ト＋促音便形」への変化が見て取れる。ただ、「言う」の場合、変化の過程で現れると考えられる「ッテ＋ウ音便形」は高年層と中年層で同程度見られたのに対し、「思う」の場合「ト＋ウ音便形」という形は主に高年層で見られ、中年層ではほとんど見られなかった。また、「言う」の場合、変化後の「ッテ＋促音便形」は高年層ではあまり見られず、中年層から割合が増えていたが、「思う」の場合は高年層においても変化後の形である「ト＋促音便形」が「 $\emptyset$ ＋ウ音便形」と同程度見られる。このことから、「言う」と「思う」では変化の時期がずれていることが窺える。

表10 高年層の引用標識と音便形（思う）

高年層	$\emptyset$	テ	ッテ	ト	トカ	トオモッテ	計
ウ音便形	13	1	－	12	－	－	26
促音便形	－	－	－	13	－	－	13
計	13	1	0	25	0	0	39

表11 中年層の引用標識と音便形（思う）

中年層	$\emptyset$	テ	ッテ	ト	トカ	トオモッテ	計
ウ音便形	27	－	－	2	－	1	30
促音便形	－	－	2	73	2	－	77
計	27	0	2	75	2	1	107

表12 若年層の引用標識と音便形（思う）

若年層	$\emptyset$	テ	ッテ	ト	トカ	トオモッテ	計
ウ音便形	1	－	－	－	－	－	1
促音便形	－	－	9	59	1	－	69
計	1	0	9	59	1	0	70

6.3. 後接する動詞の各活用形におけるト抜け率

前節 6.2 では、音便形を持つテ形・タ形のみに着目していたが、この節では 6.1 と 6.2 を踏まえ、音便形を持たない「言う」「思う」におけるテ形・タ形以外の形にも着目し、それぞれの場合におけるト抜け率を見ていく。以下、「ト言う」「ト思う」それぞれにおけるト抜け率を、音便形を持つ「テ形・タ形の場合」と音便形を持たない「それ以外の場合」に分けて分析を行う。

6.3.1. 「言う」の各活用形におけるト抜け率

表 3 で示した、本研究で得られた「言う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合全てにおけるト抜け率と、表 7～表 9 で示したテ形・タ形（音便形を持つ形）におけるト抜け率から、テ形・タ形以外の場合のト抜け率を求め、それぞれをまとめたものが表 13 である。それぞれの場合の用例数とト抜け率がセットになっており、用例数は「ト抜けの用例数／その活用形における全ての用例数」となっている。

表 13 活用形ごとの「ト言う」のト抜け率

	テ形・タ形 (〇/総数)	ト抜け率	それ以外 (〇/総数)	ト抜け率	全体 (〇/総数)	ト抜け率
高年層	108/145	74.5%	26/60	43.3%	134/205	65.4%
中年層	131/301	43.5%	5/80	6.3%	136/381	35.7%
若年層	6/86	7.0%	2/49	4.1%	8/135	5.9%

全世代において、テ形・タ形の場合の方がそれ以外の場合よりもト抜け率が高くなっていることが分かる。中でも中年層はその傾向が強く、テ形・タ形の場合は 43.5% と半数近くト抜けしているのに対し、それ以外の場合のト抜け率は若年層と同程度まで低くなっている。また、テ形・タ形の用例数はそれ以外の用例数に比べて多く、それに応じてト抜けの用例数も、テ形・タ形が多くを占め、それ以外の形は比較的少なくなっていた。

6.3.2. 「思う」の各活用におけるト抜け率

前節と同様、表 5 における、「思う」の語彙的意味がそのまま用いられる場合のト抜け率と、表 10～表 12 におけるテ形・タ形のト抜け率から、テ形・タ形以外の場合のト抜け率を求め、まとめたものが以下の表 14 である。表記方法は表 13 と同様である。

表 14 活用形ごとの「ト思う」のト抜け率

	テ形・タ形 (〇/総数)	ト抜け率	それ以外 (〇/総数)	ト抜け率	全体 (〇/総数)	ト抜け率
高年層	13/39	33.3%	4/23	17.4%	17/62	27.4%
中年層	27/107	25.2%	0/33	0.0%	27/140	19.3%
若年層	1/70	1.4%	0/21	0.0%	1/91	1.1%

「ト言う」の場合と同じく、テ形・タ形の場合の方が、それ以外の場合よりもト抜け率が高くなっていることが分かる。中年層と若年層におけるテ形・タ形以外の形の場合については、0%となっている。また、ト抜けの用例数も同様に、テ形・タ形が多くなっており、それ以外の形ではほとんど現れていないことがわかる。ただ、やはり「言う」に比べるとト抜け率は全体的にかなり低くなっている。

7. 考察

考察に入る前に、ここで本研究におけるリサーチクエスチョンを再掲しておく。

- (a) 各世代において、ト抜けを含む引用標識はどのように用いられているのか。また、どのように変化しているのか。
- (b) 引用標識と引用動詞「言う」「思う」の音便形はどう共起しているのか。
- (c) 引用動詞「言う」「思う」の活用形によって、ト抜けの生じやすさに違いはあるのか。

本節では、6節での分析結果を踏まえつつ、上記のリサーチクエスチョンに沿って考察していく。また、分析の段階では一旦まとめて扱っていた「ユーテ類」についても触れる。

具体的には、7.1節で(a)について、7.2節でユーテ類について触れ、7.3節で(b)について考察する。7.4節では(c)について考察する。

7.1. 引用標識のバリエーションと変化

まず6節で明らかになったこととして、ト抜けは「言う」の場合、「思う」の場合ともに、高年層から若年層にかけて衰退しており、特に若年層ではほとんどト抜けが見られなくなっている。

ト抜けに代わって用いられている引用標識は、「言う」の場合ッテが最も多く、全世代で最もよく用いられていた。そのほかには、高年層・中年層でユーテ類が一定数見られ、中年層ではトカが他の世代に比べてよく用いられていた。大阪方言において、ト抜けに並ぶ伝統的な引用標識であるテも、ト抜けと同様に世代が下がるにつれて使用されなくなっていた。「思う」の場合は、どの世代においてもトがト抜けよりも多く用いられており、また「言う」の場合に比べて引用標識のバリエーションは少なかった。若年層においてはッテもある程度見られた。

このようにト抜けが衰退し、代わってッテやトが用いられるようになった要因としては、ト抜けは生起できる環境がかなり限られているのに対し、ッテやトは生起環境に制限がない、ということが考えられる。先述の通り、ト抜けは引用句に「言う」「思う」が後接する場合のみでしか用いることができず、これ以外の動詞で引用する場合は、「ッテ」や「ト」などの引用標識が必要となる。したがって、高年層のようにト抜けを使用する話者は、引用を行うたびにト抜けが使用可能な環境であるかを検討し、ト抜けを用いるか他の引用標識を用いるか、という判断を毎回する必要がある。一方、若年層のようにト抜けを使用しない話者は、引用の際このような判断をする必要がなく、ッテやトをつけるだけで、どの動詞でも引用形式を作ることができる。つまり、引用形式を作る際の選択肢を減らし、簡潔にするために、制限の厳しいト抜けが衰退し、制限のないッテまたはトが用いられるようになって

いると考えられる。また、若年層において、引用動詞が「思う」の場合にッテが一定数使用されているのは、「言う」の場合に最もよく使用する引用標識がッテであることが影響していると考えられる。

また、ユーテ類もト抜けと同様、高年層・中年層において見られ、若年層ではほとんど見られなくなっている。小西（2013）は「と言う」「と思う」のテ形に関して次のように述べている。

「と言う」「と思う」のテ形の例には、引用句（引用内容＋引用標識）と述語動詞との間に、他の成分が介在する例や、引用句に副助詞・間投助詞が後接する例が目立つ。（中略）の化は、述語動詞が「言う」「思う」で、かつ、引用句と述語動詞との間に他の成分や助詞が介在しない場合にしか起こらないという制限を持つ。「と言う」「と思う」テ形の引用標識は、こうしたの制限を補う側面を持つと言える。

（小西 2013）

本研究では、引用標識と引用動詞の間に他の成分が介在するものを分析対象外としているため、この点に関しては不明である。ただ、ユーテ類が生まれた背景に、ト抜けの制限を補う目的があったとすると、ト抜けが衰退し、特に制限のないッテが主に使用されるようになった現在では、存在意義が薄れ、若年層では見られなくなっていると説明することができる。

また、「言う」の語彙的意味が希薄化した場合や、「思う」がモダリティ化した場合には、語彙的意味がそのまま用いられる場合に比べて、ト抜けが生じにくくなっている。これは、特定の引用標識と引用動詞が文法化やモダリティ化し、結びつきが強くなっているためであると考えられる。したがって、引用標識のバリエーションも、語彙的意味がそのままの場合よりも少なくなっている。

7.2. ユーテ類のバリエーション

この節では、6 節にて「ユーテ類」としてまとめていた引用標識の詳細について見る。

インフォーマントごとにユーテ類の内訳をまとめたものが表 15 である。全体として用例数が少なかったため、世代ごとにまとめることはしていない。

バリエーションの内訳を見るとのユーテが一番よく使用されている。富山市方言を対象に「と言う」由来の引用標識を扱った小西（2013）においては、「と言う」テ形相当の「ユーテ」「トユーテ」「チューテ」のうち後 2 者は稀に現れる程度で、方言として最も自然かつ頻繁に現れるのは「ユーテ」である」と述べられていたが、大阪方言でも同じことが言えそうである。したがって、他のバリエーションはのユーテから派生したものだと考えられる。

また、用例数は少ないが世代ごとに見てみると、のユーテが主に見られる高年層とは違い、中年層ではのユーテのほかに、ッテユーテ、ッテユッテ、トカユッテなどの使用も比較的多く見られる。「の＋ウ音便形」由来の引用標識のほかに、「ッテ＋ウ音便形」や「ッテ＋促音便形（混交形）」由来の引用標識がバリエーションとして現れていることは、前節で述べた引用標識のバリエーションの変化や、次節で詳しく触れる引用標識と音便形の変化と一致

表 15 ユーテ類の内訳

ID	ヨユ(一)テ	テユ(一)テ	ッテユ(一)テ	ッテユッテ	ッテイツテ	トカユーテ	トカユッテ	トカイッテ
S1	5	1	1	1	1	—	—	—
S2	2	—	—	—	—	1	—	—
S3	—	—	—	—	—	—	—	—
S4	3	—	—	—	—	—	—	—
M2	6	—	2	—	—	1	—	1
M3	2	—	2	1	—	—	4	—
M4	—	—	—	1	—	—	—	—
M8	—	—	—	1	—	—	—	—
Y3	—	—	—	—	—	—	1	—
計	18	1	5	4	1	2	5	1

するように思われる。引用標識と音便形が変化したことにより、機能は違えど音は同じであるユーテ類も、同じ形へと変化したと考えられる。

7.3. 引用標識と音便形の共起関係

「言う」「思う」における引用標識と音便形は、高年層から若年層にかけて「ヨ＋ウ音便形」から「ッテ／ト＋促音便形（混交形）」へと変化している。音便形がウ音便形から促音便形へと変化しているのは、従来大阪方言において、ト抜けに後接する動詞がテ形・タ形の場合、その動詞はウ音便形である必要があるということが影響していると考えられる。高木（2006）においても、「言う」「思う」のウ音便形が他の動詞に比べて残っているのは、ト抜けがあるからだという結果が示されており、ト抜けによってウ音便形の存在意義が保たれていると言える。したがって、ト抜けが衰退することで、後ろの動詞の音便形は必ずしもウ音便形である必要がなくなり、ウ音便形の存在意義が薄れたために、促音便形へと変化したと考えられる。変化の過程において「ッテ＋ウ音便形」「ト＋ウ音便形」という形が見られることから、ト抜けの衰退後、それを追いかける形で、存在意義を失ったウ音便が衰退していることが分かる。

さらに、「言う」の場合、「ッテ＋ウ音便形」は高年層から中年層にかけて同程度見られたが、「思う」の場合、「ト＋ウ音便形」は主に高年層でのみ見られた。このことから、同じ引用でも、「言う」より「思う」の方が引用標識と音便形の変化が早いことが分かる。これについては、先述の通り、日常的に使用される言葉の方が、方言形が残りやすいという要因も考えられるが、もう一つ考えられる要因として、5.2 節で述べた「ト思う」のモダリティ化が挙げられる。「ト言う」の語彙的意味が希薄化した場合には、ある程度ト抜けの例も見られたが、「ト思う」がモダリティ化している場合、ト抜けしている例はほとんど見られなかった。このことから、「ト」と「思う」のつながりは、「ト」と「言う」のつながりよりも強いことが考えられる。したがって、モダリティ化していない場合でも、「思う」に使用され

る引用標識はトに収束しやすくなり、結果として「言う」よりも早くト抜けが衰退しているのではないだろうか。

7.4. 引用動詞「言う」「思う」の各活用形におけるト抜けの生じやすさの違い

6.3 節では、「言う」「思う」の活用形ごとのト抜け率は、テ形・タ形の場合がそれ以外の形の場合よりも高くなっていることが明らかになった。従来、ト抜けというのは、後ろの動詞がテ形・タ形であればその動詞はウ音便形でなくてはならないという原則があるが、後ろの動詞は必ずしもテ形・タ形である必要はない。したがって、本研究から得られた、テ形・タ形の場合にト抜け率が高くなっているという結果から、現在の大阪方言にト抜けはテ形・タ形以外の場合には生じにくくなっていると言うことができる。

この要因としては、テ形・タ形の場合、ウ音便形または促音便混交形が主に用いられている（6.2 節参照）ことが考えられる。ウ音便形は伝統的な大阪方言の音便形、促音便混交形はウ音便形と標準語形の促音便形が接触したことで生まれた音便形であり、両者とも方言的な要素を持つ形である。そして、ト抜けも同様に方言らしい形式である。そのため、テ形・タ形の場合にト抜けが生じやすいのではないかと考えられる。一方、テ形・タ形以外の形は音便を持たないため、標準語と同じ形になる。したがって、方言らしい表現であるト抜けは少し異質なものとなるため、テ形・タ形の場合に比べてト抜け率が下がっているのではないだろうか。

8. まとめと今後の課題

最後に、これまでの考察を踏まえ、リサーチクエスションごとに本研究で明らかになったことをまとめていく。

(A) ト抜けは高年層では比較的によく用いられているが、世代が下がるにつれて使用率は下がり、若年層ではほとんど用いられなくなっている。ト抜けに代わって用いられている引用標識としては、「言う」の場合ッテ、「思う」の場合はトがよく用いられており、世代が下がるにつれて引用標識のバリエーションは少なくなっていた。この要因としては、ッテやトはト抜けと異なり、生起条件に制限がなく、どの引用にも用いることができるという高い汎用性を持っていることが考えられる。

またト抜けと同様、高年層・中年層を中心にユーテ類が用いられていたが、若年層ではほとんど用いられていなかった。これは、ユーテ類はもともとト抜けの生起条件を補う形で用いられており、ト抜けが衰退したことによって存在意義を失ったためだと考えられる。

動詞「言う」と「思う」は、両者とも語彙的意味がそのまま用いられる場合の方がト抜けしやすくなっていた。語彙的意味が希薄化した場合や、モダリティ化した場合と言うのは、「ト＋言う」や「ト＋思う」のように特定の引用標識と引用動詞の結びつきが強くなっており、そのために引用標識のバリエーションは語彙的意味がそのまま用いられる場合に比べて少なく、かつト抜け率も低くなっていると考えられる。

(B) 引用標識と音便形の組み合わせは、高年層から若年層にかけて、「ㇿ＋ウ音便形」

から「ッテ／ト＋促音便形（混交形）」へと変化している。音便形がウ音便形から促音便形へと変化しているのは、ト抜けの衰退により、ウ音便形の存在意義が薄れたからだと考えられる。ただ、その過程において、「ッテ／ト＋ウ音便形」と言う形が見られることから、ウ音便形の存在意義はト抜けによってのみ保たれているのではないことがわかる。これに関しては、「言う」「思う」は他の動詞よりも使用頻度が高く、方言形が残りやすいということが影響しているのではないかと考えられる。

また、ト抜けのほかに見られた引用標識としてユーテ類があったが、このユーテ類も同様に、「のユーテ」から「ッテユッテ」などにバリエーションが変化していた。

(C) 「言う」「思う」はテ形・タ形の場合にト抜けしやすく、それ以外の場合はト抜けしにくいことが明らかになった。これは、大阪方言における「言う」「思う」のテ形・タ形では、ウ音便形もしくは促音便混交形という方言的な音便形がよく使用されることが影響していると考えられる。テ形・タ形以外の場合は、標準語と同じ形になるため、方言らしい表現であるト抜けは少し異質となり、共起しにくくなっていると考えられる。

今後の課題としては、引用標識が「言う」の場合ッテに、「思う」の場合トに収束する理由を明らかにすることが挙げられる。本研究では、高年層・中年層にかけて多様なバリエーションが見られた引用標識が、若年層では「言う」の場合はッテ、「思う」の場合はトに収束しつつあることが明らかになった。しかし、「言う」と「思う」で収束する引用標識が異なる理由までは考察することができなかった。引用句を取り得る他の動詞についても調査し、どの引用標識に収束するのか、なぜその引用標識に収束するのかについても調査してみたい。

また、発展的課題として、以下の2点が挙げられる。

一つは、ト抜けの衰退を大阪方言全体の変化の方向性と関連付けることである。ト抜けは大阪方言の一つの特徴であるため、ト抜けの衰退は大阪方言らしさが薄れることであると言える。若年層の使用する引用標識は、標準語形に近づいているが、話者自身は、方言が衰退しているという意識がほとんどないようだった。ト抜けの衰退や引用標識の変化と、話者の意識との関わり合いも踏まえながら、大阪方言全体の変化の方向性について考察することが求められる。

もう一つは、若年層が使用している「～みたいな」との関係である。本研究における調査では、若年層の用例が他の世代に比べて少なくなっていた。これは全体的な発話量の違いとも考えられるが、「と言う」「と思う」に代わって、本研究で分析対象としていなかった「～みたいな」等の別の表現が引用標識や引用動詞と同様の機能を果たしている可能性もある。「と言う」「と思う」という形式だけにとらわれず、表現の仕方の世代差にも注目して分析することで、こうした点を明らかにできると考える。

いずれも本研究では扱うことができなかったが、残された課題として記しておく。

【参考文献】

朝日祥之 (2008) 『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』, pp.139-166, ひつ

じ書房.

- 岸江信介 (2009)「大阪語とは何か—大阪語の歴史的背景と方言区画—」岸江信介・中井精一・鳥谷善史編『大阪のことば地図』, pp.8-16, 和泉書院.
- 甲田直美 (2003)「名詞修飾節による「語り」の終結—「みたいな」「っていう」の表現性と談話機能—」『言語の創発と身体性』, pp.431-447, ひつじ書房.
- 郡史郎編 (1997)『大阪府のことば』, 明治書院.
- 小西いずみ (2010)「西日本方言における引用標識ゼロ化の定量分析」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部第59号, pp.123-130.
- 小西いずみ (2013)「西日本方言における「と言う」「と思う」テ形の引用標識化」『形式語研究論集』, pp.301-317, 和泉書院.
- 佐藤虎男 (1995)「音便形にみる大阪弁の動態」『関西方言の社会言語学』, pp.33-53, 世界思想社.
- 砂川千穂 (2000)「日本語における「とか」の文法化について—並立助詞から引用マーカーへ—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』6, pp.61-73.
- 高木千恵 (2006)「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究 別冊』2.
- 辻大介 (1999)「「とか」弁のコミュニケーション心理」『第3回 社会言語科学会研究大会 予稿集』, pp.19-24.
- 宮崎和人 (1999)「モダリティ論から見た「～と思う」」『待兼山論叢 日本学篇』33, pp.1-16.
- 森山卓郎 (1992)「文末思考動詞「思う」をめぐる一文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』11-9, pp.105-116, 明治書院.
- 山本俊治 (1982)「大阪府の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』, 国書刊行会.

にしだ ゆき (大阪大学卒業生)